様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ２３ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２２１１

研究課題名（和文）民間の視座を導入した中国通俗文芸受容史の構築―明治以後の民間翻訳をキーワードに―

研究課題名（英文）Building of the Chinese popular literature acceptance history into which a private viewpoint was introduced

研究代表者
勝山　稔（KATSUYAMA, MINORU）

東北大学・国際文化研究科・教授

研究者番号：８０３０２１９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：　民間翻訳の歴史の中でも画期的存在である『支那文学大観』は刊行途中で出版社が経営破綻したため、刊行経緯には不明点も多かった。しかし、論者は昨年、支那文学大観刊行会の企画書『支那文学大観刊行に就いて』と、『支那文学大観会報』（１～９号）を発見、その企画立案の経過や、なぜ本出版計画が頓挫したのかを関連資料から詳細な分析を試みた。
　なお『西遊記』については、近現代日本における西遊記受容史を構築するため、宇野浩二、伊藤貴麿、佐藤春夫による訳書の西遊記翻訳史における位置づけを考察した。また、日本において沙悟浄が河童とされるようになった時期とその経緯を調査した。

研究成果の概要（英文）：It was a private intellectual that acceptance of a Chinese popular novel was supported in prewar Japan. But their translation was ignored and we couldn't also grasp their active outline. So I paid attention to private translation by this research and reconsidered Chinese popular cultural acceptance history. A publishing company manages the 『支那文学大観』 which is remarkable existence on the publication way in the private translation history, there were also a lot of unclear points in publication process because I failed.
 In order to construct the translation history of the "Journey to the West" in modern Japan, I examined the position of the translation by Koji Uno, Takamaro Ito and Haruo Sato.Also, I investigated the time and circumstances when Sagojyo became Kappa in Japan.

研究分野：中国文学

キーワード：井上紅梅　白話小説　井上商店　上海　西遊記　翻訳　河童

１．研究開始当初の背景

中国から日本への文化受容は古来連綿と行われてきた。中でも古典小説について言えば、二つの流れがあり、第一には文言小説（漢文の小説）の受容、第二には白話小説（白話＝現代中国語に近い口語の小説）の受容があった。日本は初め文言小説を受容したが、明代以後、白話で書かれた通俗小説が登場し『西遊記』『三国志演義』『水滸伝』『金瓶梅』『紅楼夢』等の著名な作品が生み出された。そのため日本でも通俗文学の受容を試みたが、明治・大正時代から戦前までの期間では、その翻訳活動の中心的役割を果たしたのは、大学の研究者ではなく、中国通俗小説を愛好する民間の知識人であった。

論者がそれを発見したのは、論者が採択された三つの文部科学省科学研究費補助金による研究①平成１７～２１年度の特定領域研究、②平成２３～２５年度の基盤研究（B）、そして③平成２４～２６年度の基盤研究（C）の研究成果から浮き彫りになった意外な事実からである。

論者は上記３件の科研費の研究で、明代の代表的な通俗小説集『三言』を取り上げ、明治時代から終戦直後までの翻訳状況を調査したが、未確認翻訳が次々と発見された。その結果、この期間に『三言』の翻訳に携わった人物が 21 名にものぼり、しかも、全体の７６%にのぼる翻訳者（１６名）は、大学に所属しない民間の知識人によって占められている事実が判明した。そのため受容史を検討する場合、民間翻訳の存在を無視しては成り立たないと論者は考えるようになった。

では、なぜこの時期に研究者の翻訳が少なかったのか。この原因を探るべく、当時の大学研究者の記録を調べると、①当時の大学では江戸以来の伝統である漢文訓読が主流で、現代中国語による口語訳は「漢学の伝統から逸脱する」として異端視されていたこと。②通俗小説は低俗なものとして一段低く見なす者が多く、本格的な研究を行う環境が大学内部に整えられていなかったことが判っている。

このように、訓読に拘泥した大学の専門家とは対照的に、通俗的な白話が現代中国語に近いことに着目した民間の知識人は、現代中国語の知識を最大限活用し、大学の研究者に先んじて翻訳を発表した。それは『三言』のみならず、『西遊記』しかり、『水滸伝』しかりである。

このようにして様々な通俗小説を日本語の口語訳で紹介し、人口に膾炙させた功績は極めて大きく、現在において日本でこれだけ中国通俗小説が社会の隅々まで広く親しまれているのは、これら民間翻訳によって生み出された功績と言っても過言ではない。

しかし、これら民間翻訳の業績は、これまで斯界で学問的に検討されることは少なく、受容史的な位置付けも検討されないまま放置されているのである。

また更に注目すべき点としては、これら中国語を解した民間の翻訳者は、中国通俗小説のみならず当時日本に於いて殆ど評価を受けていなかった中国近代小説にも着目し、積極的な翻訳活動を展開していた点である。つまり彼らの受容活動は中国通俗文学のみならず、中国近代文学の父ともいえる魯迅の小説の、日本における最初期の翻訳者として極めて重要な役割を果たしているのである。

そのため論者は、この種の民間翻訳に適正な評価を与えるべく、戦前期における民間翻訳者が果たした受容活動の役割について詳細な分析を試みたいと考えている。

なお、『西遊記』については、日本における西遊記受容については、磯部彰『『西遊記』受容史の研究』（1995）が江戸時代の受容状況について述べており、近現代については、鳥居久靖「わが國に於ける西遊記の流行 －書誌的に見たる」（1955）があり、重要な翻訳書を列挙しているが、これは書誌的な面について概略的に述べたものである。従って近現代における個々の翻訳書や、内容面の変遷については十分に検討されているとは言いがたい。そこで、日本の児童書西遊記における西遊記の各挿話の採用状況や、その変化を探るべく、2013 年に「日本における子ども向け『西遊記』について－挿話選択の傾向と方法－」を発表した。本研究はこれに続くものである。

２．研究の目的

研究の目的は大きく３点に分かれる

（１）民間翻訳と大学の専門家の翻訳との位置づけを『支那文学大観』の編纂から分析を試みる

民間の視座を導入する場合でも、民間翻訳と大学の研究者とによる翻訳とが、受容史の上で如何なる関係にあったのかを充分に見据える必要がある。それを知る格好の手掛かりとなるのが、大学の研究者と民間翻訳者が協同翻訳した『支那文学大観』（1926-1927）である。本叢書は刊行途中で出版社が経営破綻したため、刊行経緯は不明点も多かった。しかし、論者は昨年、支那文学大観刊行会の企画書『支那文学大観刊行に就いて』と、『支那文学大観会報』（１～９号）を発見、その企画立案の経過や、大学研究者と民間翻訳者の名簿も今回初めて明らかになった。それら新発見資料群を十二分に活用し、今までにない視点から多角的・実証的に解明し、両者の位置関係まで明らかにしたい。

（２）明代通俗小説『三言』をケース・スタディとして民間翻訳の翻訳水準及び事跡研究試みる

民間の視座を導入した受容史を構築するためには、まず民間翻訳が検討に足る価値があることを客観的に証明する必要がある。そのため、本研究では民間翻訳の翻訳水準について、同時期の大学の専門家による翻訳と対照分析を実施する。これについては拙稿で基

礎研究を実施済みであり、その成果を踏まえ、民間翻訳の中でも重要な井上紅梅・佐藤春夫・鈴木真海の事跡研究及び翻訳の分析を試みたい。
（３）『西遊記』については、近現代日本における西遊記翻訳史を構築するために、ターニングポイントとなる翻訳者たちの位置と、翻訳書全体が時代と共に変化した状況を明らかにした。

３．研究の方法
受容史における民間翻訳の位置付けの明確化を図るため、『支那文学大観』の編纂の経緯を分析する。『支那文学大観』の考察に必要な①企画書『支那文学大観刊行に就いて』、②『支那文学大観会報』（第１号～第９号）③『支那文学大観』既刊分については収集済みであり、採択後すぐ研究に着手できる。ただ④支那文学大観刊行会の著作権者（佐々木久）発行者（永田勇造）に関係する資料は、その過半を収集したに過ぎず、⑤『支那文学大観刊行に就いて』に記載された翻訳者名簿に記載された民間翻訳者・大学の専門家の合計１３名のうち、９名については関連資料の収集を行っていない。そのため、著作権者・発行者・訳者に関する資料を数多く収集している全国各地の図書館で収集作業を実施した。
また『支那文学大観』について、もう一つ考察の手掛かりになるのが支那文学大観刊行会の親会社の存在である。支那文学大観刊行会は、もともと共立社の支那文学関係書籍を専門に扱う子会社として設立されたことを応募者は突きとめており、共立社は現在も存続している。そのため共立社の協力を得て支那文学大観刊行会設立に係わる資料や刊行開始（大正１５年３月２８日）から出版停止（昭和２年４月１５日）に至るまでの関連する資料収集を実施したいと考えている。
白話小説の受容に多大な貢献をもたらした井上紅梅の事跡の中から、先行研究で未解明であった箇所に考証を加え、先行研究の不備を補完した。今回は寺田寅彦の著作に見える井上紅梅の事跡に注目して検討を試みたほか、また当時の日刊紙に記載された記事・広告と紅梅の随筆と用いて、「井上紅梅が、なぜ井上商店を追われ、上海に渡航し、支那風俗研究を開始したのか」という紅梅の事跡研究の中で最も重要な疑問について、綿密な考察を試みた。
なお、『西遊記』については、宇野浩二・伊藤貴麿・佐藤春夫の訳業を検証し西遊記翻訳史上に位置づける。また、西遊記に登場する沙悟浄が河童化していく状況を俯瞰的に検討した。

４．研究成果
本研究では、まず近代日本における民間翻訳の受容史を語る上で必要不可欠な課題である支那文学大観について検討を試みた。『支那文學大觀』(以下『大観』と省略)は、大正 15 年 3 月から昭和 2 年 4 月まで刊行された、中国の古典の中でも戯曲小説を邦訳した叢書である。その内訳は「元曲選」等の戯曲作品が 7 巻、「京本通俗小説」「今古奇観」等の白話・文言小説が 7 巻の合計 14 巻で構成されている。このラインナップからも当時の中国文学叢書の中で、「特異」な存在であることが充分に理解できる。その「特異」は三つあり、第一には、関心が低かった中国の通俗的な戯曲小説に注目した点、第二には、当時の日本で全く注目されていなかった(魯迅等の)中国新文学の翻訳を企画した点、第三には大学の研究者と民間の文学者が共同して語釈と翻訳作業を実施した点である。
翻訳文の分析の結果『大観』における文言小説と白話小説の翻訳状況は対称的であった。白話の翻訳は厳格な逐語訳である一方、文言は原文を踏まえつつも、その状況に応じた多彩な表現を織り交ぜていた。文言は口語文に翻訳する必要があるため、限られた字句を根拠に解釈しなければならないが、その際には訳者による主観的な判断を介在させる余地があった。そのため、白話の翻訳よりも、文言の翻訳の方が翻訳内容に肉付けさせる機会が生まれたことが判明した。
この近代日本における民間翻訳の受容史を語る上で不可欠な課題である支那文学大観について次年度に検討を試みた。『大観』は、大正末年に刊行を開始した中国の戯曲小説を邦訳した叢書である。本稿では、支那文学大観刊行会が予約出版に際して配布した『大観』内容見本と、『支那文学大観会報』(一～九号)から、その企画立案の経緯を探り、白話小説受容史から見た『大観』の位置づけについて従来未解明であった箇所に考証を加え、先行研究の不備を補完することに成功した。内容を要約すると以下の通りである。
『大観』は１中国の古典の中でも顧みられることが少なかった戯曲小説に注目し、本邦未訳の作品を中心に翻訳を手がけたこと、2 当時評価の対象にならなかった中国における現代小説や現代戯曲作品の翻訳を企画したこと、そして 3 文学的芸術性と学術的価値の両方を極めて高い水準で追究した点に大きな特徴があった。
しかし実際の刊行は多難を極め、配本の遅延が慢性化した。また第六回配本「風箏誤」の出版譴責処分が発生したほか、『京本通俗小説』翻訳問題も更に加わった。『大観』刊行作業中に、偶然『警世通言』(大正一五年九月)が発見された。『警世通言』の発見によって、『京本通俗小説』の存在自体が疑問視され、書誌学的発見が相次ぐ中で急遽翻訳が見送られたと推論した。
また、昭和二年になると刊行会の経営が行き詰まり、第九回配本をもって停刊した。
刊行会に関係する資料を調べると、刊行会の代表者・永田勇造は同時に共立社の代表者でもあり、永田は発足間もない共立社で出版事

業を行いながら、刊行会を発足し予約出版事業を展開していること。また刊行停止後も刊行会の所在地は共立社と同一であり、両社は同一異名か、もしくは極めて深い関係にあった出版社であることが分かった。

また、白話小説の受容に多大な貢献をもたらした井上紅梅の事跡の中から、先行研究で未解明であった箇所に考証を加え、先行研究の不備を補完した。

今回は第一に寺田寅彦の著作に見える井上紅梅の事跡に注目して検討を試みた。

寅彦の日記・随筆等の著作は、紅梅が東京に滞在していた青年期や晩年期の記録が多く、中国滞在中の記録が圧倒的に多い、紅梅の事跡を補完する貴重な資料であることが判明した。

特に、従来全く不明であった紅梅の青年期の動向が、寅彦の随筆に詳述され、それによると、寅彦の上京時には既に井上商店内では文学熱が盛んであり、紅梅も文学誌への投稿を盛んに行っていたこと。そしてその状況に夏目漱石や正岡子規と交遊を持つ寅彦が加わり、寅彦自身も紅梅らに俳句の手ほどきをすることもあった。このように紅梅は、多感な青年期に、寅彦を介して漱石や子規という文学思潮も吸収し、文学への憧憬を深めていった。

また従来未解明であった紅梅の上海渡航直前の状況や、紅梅渡航後の井上商店の動向などが明らかになった。前者は井上家の後継問題があり、紅梅は井上商店の後継者に不向きとして、遅くとも明治三八年に紅梅を「廃嫡」となり、井上商店を出て湯島天神町に仮寓し、中華料理屋経営や、日本郵船への転職の模索が見えること。また紅梅の実子の存在も寅彦の日記で初めて確認された記録である。

後者については、井上安兵衛と未亡人の死去、井上芳蔵の二代目井上安兵衛の襲名と、肺病による死亡、そして井上商店の一家離散という結末まで確認できた。

また、紅梅の帰国以後の動向についても、紅梅本人の記録が皆無に近かったが、寅彦の日記によって、経済的に逼迫していた事実を確認することが出来た。昭和五年以後は、『魯迅全集』と『今古奇観』の翻訳という彼の二大業績が結実する時期ではあるが、その華々しい業績とは裏腹に、彼は常に貧困との闘いを続けていたのである。

また第二として、新たに当時の日刊紙に記載された記事・広告と紅梅の随筆と用いて、「井上紅梅が、なぜ井上商店を追われ、上海に渡航し、支那風俗研究を開始したのか」という紅梅の事跡研究の中で最も重要な疑問について、綿密な考察を試みた。内容を要約すると以下の通りである。

井上紅梅は「廃嫡」となったものの、紅梅の生計維持のために井上商店の一部の業務を委託していた可能性が高い。突然「廃嫡」となった紅梅を路頭に迷わせてはならぬと言う養父井上安兵衛の計らいであった可能性は大きい。

井上商店の世代交代は喫緊の課題であった。それが先代井上安兵衛の年齢の問題である。日露戦争が集結し、軍需医療器械が主要業務であった井上商店にとっては経営の転換を迫られる時期にも直面していたのである。

明治四一年に井上商店は専売特許の縮織繃帯の製造技術を活用して「翁縮夏シャツ」を開発、また本商品を通信販売で全国に販売し更に福引きも取り入れ、一気に全国へ小売り販売を拡大しようと企画している。西南戦争から日清日露と軍需品の扱いで急成長を遂げた井上商店であったが、取り扱いを軍需から民需への転換を図った方策の一つ、それが「翁縮夏シャツ」であった。しかし通信販売という企画は単発で終わっており、少なくとも経営的に成功したものとは言えない。

井上安兵衛が死去後の大正二年には「翁縮夏シャツ」に代わる新製品として、布に浸透させた薬剤で消毒を行う「ステリー布」を開発する。後にはコレラ、チフスの殺菌に効果がある「殺菌ステリー布」の販売も開始するが、時期を同じくして井上商店の経営陣が相次いで病臥し、大正七年五月一六日には店主・宮田芳三が死去し、井上商店は一家離散となった。

また紅梅は、支那料理屋の失敗が上海へ渡航する直接的な原因になったと先行研究は指摘するが、正確には井上安兵衛の死去に伴う井上商店の商権と資産譲渡にあったと考える方が妥当であること。そして先行研究では「紅梅の上海時代は酒にあけ女遊びに暮れ、食道楽と芝居に暮れ、深く支那の五大道楽の世界に入りこんだ」とあるが、正確には上海の日刊紙である神州日報の編集長・余穀民をはじめとした新聞記者・新聞小説家との交遊から支那の遊芸や風俗に関心を持ったこと、また勤務先である上海日日新聞の報道姿勢に対する強い不満、そして貿易会社の不正取引をめぐる事件が、新聞記者から転職する直接的な契機になったことが判明した。

なお『西遊記』については、日本で翻訳された『西遊記』の特徴である「沙悟浄の河童化」について調査し、その実体と変遷について考察し、重要な民間翻訳の一つである佐藤春夫の翻訳に対する考察を試みるため、資料の収集を行った。

殊に今回の研究のうち、個別の翻訳者を西遊記翻訳史上に位置づける部分では、宇野浩二・伊藤貴麿・佐藤春夫の訳業について検証した。

まず、西遊記の「流布浸透に貢献してきた類希な作」（堀 1994）といわれる宇野浩二の児童書西遊記について調査してみると、現在知りうる範囲に限っても実に二十点も刊行されていた。そこでそれらを整理し、実質的には五つの作品であることと、そのうちの二種類が特に繰り返し刊行されていることを

明らかにした。
　次に、宇野浩二の西遊記を念頭に置きつつ伊藤貴麿訳西遊記の特徴を検討した。宇野訳が、江戸時代のダイジェストされた翻訳『画本西遊全伝』を再編したものであるのに対し、伊藤訳は中国の児童書（方明改編『西遊記』）を翻訳したものなのだが、底本の違いによって文章・描写が詳細なものとなり、原作がもつユーモアや諧謔性が十分に表現できるようになったことが明らかになった。また、宇野の晩期の西遊記は比較的詳細な文章をもつ編集になっているが、これが伊藤訳の出現に刺激された結果である可能性が指摘できる。
　伊藤訳の出現によって、西遊記の文章そのものの魅力が見いだされると、次は児童書ではなく、原作『西遊記』そのものに拠った翻訳が目指されることとなる。しかし、それは決して容易なことではなく、何人もの作者が中途での挫折を余儀なくされる。佐藤春夫の翻訳もその一つである。本研究をとおして佐藤春夫訳のそのような位置が見えてきたが、佐藤春夫の中国文学翻訳には代筆問題をはじめとして検討を要する問題が多く存在しており、これが次の課題と言えるだろう。
　上記のように個別の翻訳者を対象とした研究を行う一方、近現代の日本の西遊記全体を統計的な手法で俯瞰的に検討する研究も行っている。今回は、児童書西遊記において、沙悟浄が河童化していく状況について検討を加えた。これによって①児童書において沙悟浄を河童とする作品が増えるのは 1980 年代であること、②その外的要因として TV における西遊記ブームがあったこと、③内的要因としてアニメ絵本や読み聞かせ本などストーリーを著しく簡略化した本の増加が挙げられること、を明らかにした。今後はこれまでの研究で明らかになった日本版西遊記の状況が、他の国、特に中華文化圏である中国や台湾の児童書西遊記とどのように異なるかという点を検討していく必要があると考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

①　勝山稔、井上安兵衛死去前後における「井上紅梅」と「井上商店」について――井上紅梅に関する事跡研究の一環として――、国際文化研究科論集、査読あり、25、2017、81-98
②　勝山稔、白話小説受容史から見た『支那文学大観』の位置付けについて――『支那文学大観』の停刊と共立社の関係を中心として、国際文化研究科論集、査読あり、24、2016、72-81
③　勝山稔、寺田寅彦の著作に現れた井上紅梅 ――井上紅梅に関する事跡研究の一環として――、アジア文化研究、査読あり、2、2016、62-79
④　井上浩一、宇野浩二の児童書西遊記、アジア文化研究、査読あり、2016、2、80-95
⑤　井上浩一、近現代日本の児童書における西遊記受容－「河童の沙悟浄」から見た－、中国児童文学、査読なし、2016、24、29-51
⑥　勝山稔、白話小説受容史から見た『支那文学大観』の位置付けについて――文言・白話小説の受容方法を中心に、国際文化研究科論集、査読あり、23、2015、90-108
⑦　勝山稔、『楊家将演義』の時代における社会事情について――都市生活と婚姻事情を中心に、『楊家将演義読本』（岡崎由美編、勉誠出版）、(アジア遊学 180)、査読あり、2015、90-104
⑧　井上浩一、西遊記翻訳史における伊藤貴麿の位置、国際文化研究、査読あり、2015、21、15-30

〔学会発表〕（計９件）

①　勝山稔、学際プロジェクト「世界発信する国際日本学・日本語研究拠点形成」、日中文化交流における「モノ」・「ヒト」・「コト」、2018 年 1 月 30 日、東北大学
②　井上浩一、第８回「海域交流と中国古典小説」研究会、佐藤春夫訳『西遊記』に関する幾つかの問題について、2017 年 12 月 3 日、東北大学
③　勝山稔、第８回「海域交流と中国古典小説」研究会、『支那文学大観』の停刊と共立社との関係（続編）、2017 年 12 月 3 日、東北大学
④　勝山稔、第８回「海域交流と中国古典小説」研究会、井上安兵衛死去前後における「井上紅梅」と「井上商店」について（続編）、2017 年 12 月 2 日、東北大学
⑤　井上浩一、第 16 回日本比較文学会東北支部比較文学研究会、西遊記受容史における佐藤春夫の位置、2017 年 07 月 22 日、東北大学片平さくらホール
⑥　勝山稔、第７回「海域交流と中国古典小説」研究会、『支那文学大観』の停刊と共立社との関係、2016 年 11 月 26 日、高知県立大学
⑦　勝山稔、第６回「海域交流と中国古典小説」研究会、井上安兵衛死去前後における「井上紅梅」と「井上商店」について、2015 年 9 月 13 日、京都文教大学
⑧　井上浩一、日本版児童書西遊記の台湾における影響、海域交流研究会、2015 年 9 月 13 日、京都文教大学
⑨　勝山稔、第６回「海域交流と中国古典小説」研究会、白話小説受容史から見た『支那文学大観』の位置付けについて、2015 年 9 月 13 日、京都文教大学

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
　　勝山　稔（KATSUYAMA,minoru）
　東北大学大学院・国際文化研究科・教授
　研究者番号：80302199

(2)研究分担者
　　井上浩一（INOUE,kouichi）
　東北大学・高度教養教育・学生支援機構・
　非常勤講師
　研究者番号： 40587169

(3)連携研究者
　　(　　)

　研究者番号：

(4)研究協力者
　　(　　)